

設楽町の縄文時代 竪穴建物跡の比較・分析

渡邊 峻

設楽ダム関連事業によって新たに発掘された縄文時代竪穴建物跡について時期ごとの棟数、形、面積、付属施設、儀礼等のデータをまとめ、その変遷を分析した。

1. はじめに

愛知県埋蔵文化財センターでは、2014年から継続的に設楽ダム建設事業に伴う事前調査として、国土交通省中部地方整備局設楽ダム工事事務所から愛知県教育委員会を通じた委託を受けて設楽町の遺跡を発掘し、多くの成果をあげてきた。本論ではその成果のうち、縄文時代の竪穴建物跡に焦点を当てて、取り上げてみたい。

設楽町域の発掘調査事例として、1954年北設楽郡旧津具村（現設楽町）の鞍船遺跡において縄文時代前期の竪穴建物跡が6基の調査事例

がある。設楽町内での縄文時代集落の実態はあまり把握されていなかった。

しかし設楽ダム建設に伴う当センターによる発掘調査が行われた結果、設楽町内で数多くの縄文時代の竪穴建物跡が発見された。本論ではこれらのデータをまとめ、設楽町域における縄文時代竪穴建物跡の移り変わりをみていきたい。

2. 対象の遺跡

対象とする縄文時代の竪穴建物跡が出土している遺跡はこれまでの調査で12遺跡存在し、図1のように①～⑩の遺跡は境川沿岸に、⑪、

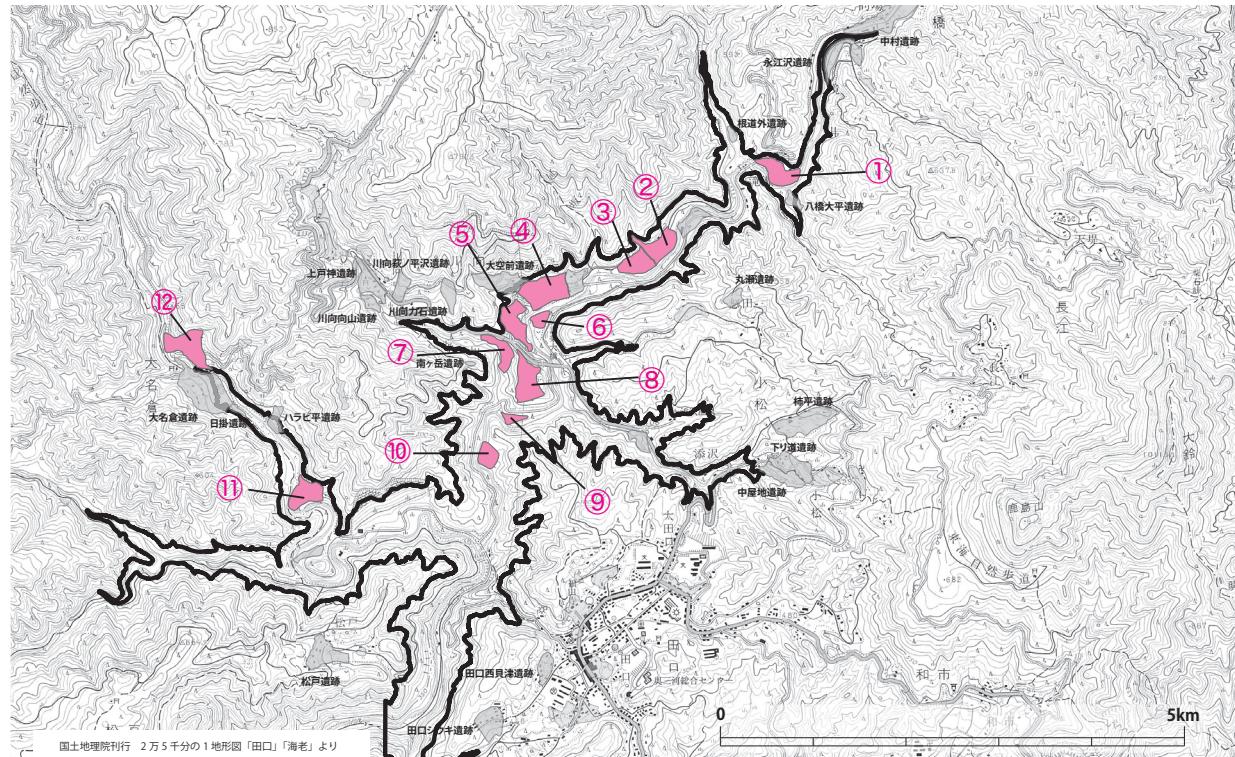


図1 縄文時代竪穴建物跡を有する設楽町ダム関連埋蔵文化財遺跡と周辺遺跡の位置図

⑫の遺跡は豊川沿岸に分布している。これらの遺跡のうち、ここでは主要な遺跡について簡潔に述べる。

①の滝瀬遺跡は境川右岸の河岸段丘上から山麓の丘陵斜面に立地する。2015年から3回発掘調査を行い、2022年現在も継続して行なっている。全12遺跡の内一番北にあり、標高も437mと最も高い位置にある。滝瀬遺跡の大きな特徴として、縄文時代早期前葉以前、9,000年前を遡る良好な竪穴建物跡が11棟見つかっている。これらは現状愛知県内における最も古い集落の調査事例となり、初期の定住集落を考察する上でも貴重な遺跡と言える。

③の石原遺跡は境川右岸のやや開けた谷地形に立地する。2018年から2回発掘調査を行い、調査は終了している。遺跡からは縄文時代晚期後葉の配石墓等が出土している他、設楽町内の縄文時代竪穴建物としては最大の面積を有し、現在2例しか確認されていない縄文時代中期前葉の竪穴建物跡325SIがある。

⑥の笛平遺跡は境川の左岸、川に対して西に張り出す段丘上に立地し、遺跡の上流に石原遺跡、下流に万瀬遺跡、境川を挟んで対岸に上ヲロウ・下ヲロウ遺跡がある。2015年の発掘調査により調査は全て終わっており、2022年には愛知県埋蔵文化財センターより報告書も刊行されている。笛平遺跡の特徴としては縄文時代中期末から後期中葉の時期の掘立柱建物跡が2棟確認された他、縄文時代後期の竪穴建物跡が21棟集中して出土したことが挙げられる。この数は設楽町内の縄文時代竪穴建物跡としては2022年現在で全体の5分の1、縄文時代後期では全体の半分以上の数である。

⑩の大崎遺跡は境川の東岸、河岸段丘状の緩斜面上に立地している。当地は現在の田口集落西にある丘陵尾根が境川に向かって伸びる末端付近に当たり、遺跡の北と東には丘陵尾根が迫っている。遺跡の特徴としては中世の大規模な水田関連遺構が検出された他、縄文時代中期から弥生時代中期に至るまでの竪穴建物跡も19棟検出している。縄文時代後期中葉から晩期の竪穴建物跡は、設楽町内ではこの大崎遺跡が唯一である。

3. 竪穴建物跡の検討

今までの設楽ダム関連事業に伴って調査された全遺跡の内、縄文時代の竪穴建物跡が確認された全12遺跡の時期別の各遺跡の竪穴建物跡の棟数と形式・構成要素をまとめたものが表1である。これをもとに設楽町における縄文時代竪穴建物跡の変遷を見ていくと、万瀬遺跡や滝瀬遺跡において縄文早期前葉の集落を築いた後(図2①~③)、縄文時代前期後半に胡桃窪遺跡にある一例と、旧津具村の鞍船遺跡では縄文前期後葉の竪穴建物跡が6棟検出されている(川添2020)。続く縄文時代中期前葉における石原遺跡での竪穴建物跡の例の後(図2⑤・⑥)、縄文時代中期中葉以後の上ヲロウ・下ヲロウ遺跡や大畠遺跡においても縄文時代中期後半から大幅に竪穴建物群の確認事例が増える(図2⑧・⑨)。この竪穴建物跡が増加する傾向は縄文時代後期初頭から前葉にかけての笛平遺跡でも見られ、縄文時代後期中葉から晩期にかけての大崎遺跡では減少する(図3)。弥生時代の竪穴建物跡は上ヲロウ・下ヲロウ遺跡と大崎遺跡で確認されている。

竪穴建物跡の面積に注目すると、石原遺跡の縄文時代中期前葉の竪穴建物跡(図2⑤)が最大で、遺跡毎の平均の面積は縄文時代中期中葉から縄文時代後期前葉に至るまで徐々に大きくなっているのがわかる(図4)。

一方住居を構成する施設に注目すると、縄文時代中期後半では多く見られた4本柱の主柱穴と壁柱穴の組み合わせが、縄文時代後期以降では激変し、ほとんどが壁柱穴主体の構成となる(図5)。これらの竪穴建物跡の特徴は長野県や関東地方の竪穴建物跡の施設の変遷と類似している(宮本1996)。平面形では隅丸方形の竪穴建物跡と円形の竪穴建物跡は縄文時代中期後葉から縄文時代後期前葉まではほぼ半々の割合だったが、縄文時代後期中葉の大崎遺跡では隅丸方形の竪穴建物跡が主流になっている(表1)。

表2では各遺構の炉跡に注目し、時期別の竪穴建物跡に伴う炉の形態と規模をまとめた。その結果、炉跡に関しても縄文時代中期後葉から縄文時代後期前葉にかけて、いくらかの変化が

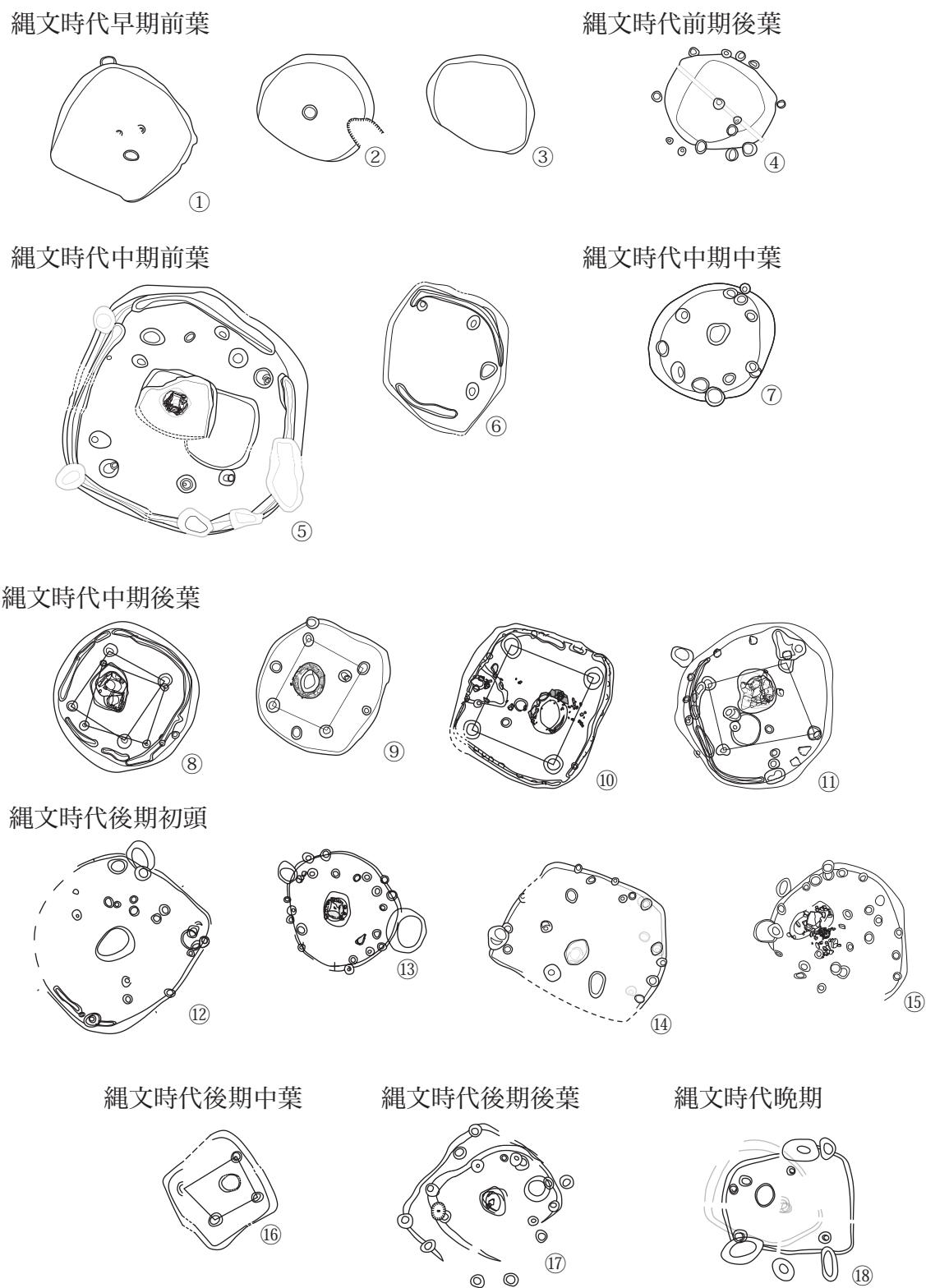


図2 設楽町ダム関連遺跡の縄文時代竪穴建物跡 (1/200)

①, ②, ③, ⑭: 滝瀬遺跡 ④: 胡桃窪遺跡 ⑤, ⑥: 石原遺跡 ⑦: 上ヲロウ・下ヲロウ遺跡 ⑧, ⑨: 大畠遺跡
 ⑩, ⑫, ⑬: 笹平遺跡 ⑪: 川向東貝津遺跡 ⑮: 西地・東地遺跡 ⑯, ⑰, ⑱: 大崎遺跡

表1 時期別の各遺跡の竪穴建物跡の形式と構成要素

時代	遺跡名	棟数	平面形式				面積			主柱	壁柱	主+壁	壁溝	
			(樋)	円形	方形	隅丸(長)	多角	最大m ²	最小m ²	平均m ²				
早期前葉	万瀬遺跡	6						6	26.4	6.15	12.47	0 棟	5 棟	0 棟 0 棟
	滝瀬遺跡	11	7	2	2				24.62	6.15	12.09	0 棟	0 棟	0 棟 0 棟
前期後葉	胡桃窪遺跡	1	1						8.48		8.48	0 棟	1 棟	0 棟 0 棟
中期前葉～	石原遺跡	2	2						47.76	11.34	29.55	0 棟	1 棟	1 棟 2 棟
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	1	1						11.34		11.34	0 棟	1 棟	0 棟 0 棟
	大畠遺跡	1				1			21.16		21.16	0 棟	1 棟	0 棟 1 棟
中期後葉	滝瀬遺跡	3	1					2	19.12	7.06	15	0 棟	0 棟	2 棟 0 棟
	下延坂遺跡	2				2			21.38	12.96	17.17	1 棟	1 棟	0 棟 0 棟
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	6	6						18.85	9.07	12.72	0 棟	1 棟	5 棟 0 棟
	笹平遺跡	3	2		1				31.18	7.24	18.68	1 棟	1 棟	1 棟 1 棟
	大畠遺跡	11	6	2	3				16.4	7.07	12.9	3 棟	0 棟	0 棟 3 棟
	川向東貝津遺跡	2				2			16	7.5	11.75	0 棟	0 棟	2 棟 1 棟
	大崎遺跡	5	1			4			19.76	9.8	13.5	3 棟	0 棟	0 棟 0 棟
	胡桃窪遺跡	2				2			19.27	10.78	15	0 棟	2 棟	0 棟 0 棟
	西地・東地遺跡	2				2			25	25	25	0 棟	1 棟	1 棟 0 棟
後期初頭～	滝瀬遺跡	2						2	27.93	27.93	27.93	0 棟	1 棟	0 棟 0 棟
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	4	2			2			13.85	7.07	11.08	1 棟	2 棟	0 棟 0 棟
	笹平遺跡	21	13			8			38.56	9.51	22.77	1 棟	16 棟	0 棟 0 棟
	大畠遺跡	1				1			16.4		16.4	1 棟	0 棟	0 棟 0 棟
	川向東貝津遺跡	3	1			2			27.35	14.4	22.25	0 棟	1 棟	0 棟 0 棟
	大崎遺跡	2				2			16	9.6	17.6	1 棟	0 棟	0 棟 0 棟
	西地・東地遺跡	3				3			25	16	20.42	0 棟	2 棟	1 棟 0 棟
後期中葉～	大崎遺跡	6				6			20	9.6	14.89	3 棟	2 棟	0 棟 0 棟
晩期	大崎遺跡	1				1			16.8		16.8	0 棟	1 棟	0 棟 0 棟

表2 時期別の竪穴建物跡に伴う炉の形態と規模

時代	遺跡名	棟数	炉 形態						炉 面積 (cm)			その他	
			なし	石壠	地床	土器敷	石敷	土器埋納	~60×60	~80×80	80×80~	不明	
早期前葉	万瀬遺跡	6	6										
	滝瀬遺跡	1		1									
前期後葉	胡桃窪遺跡	1		1									
中期前葉～	石原遺跡	2	1	1						1			
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	1			1					1			
	大畠遺跡	1	1										
中期後葉	滝瀬遺跡	3		3					1		2		
	下延坂遺跡	2		2						1	1		副炉 1
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	6	4	2					6				
	笹平遺跡	3	1	1		1					2		
	大畠遺跡	11	8	3					2	1			副炉 1
	川向東貝津遺跡	2		2					1	1			
	大崎遺跡	5	1		4				4				
	胡桃窪遺跡	2		2					2				
	西地・東地遺跡	2		2					1	1			
後期初頭～	滝瀬遺跡	2		1					1	1		1	
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡	4	1	1	1				1		1	2	
	笹平遺跡	21	6	5	5	2	2	1	4	2	9		
	大畠遺跡	1		1							1		
	川向東貝津遺跡	3	2	1								1	
	大崎遺跡	2			2				2				
	西地・東地遺跡	3		1		2			2			1	
後期中葉～	大崎遺跡	5	1	2	2				3	1			
晩期	大崎遺跡	1		1					1				

表3 時期別の堅穴建物跡に伴う儀礼の形態

時代	遺跡名	炉 廃絶儀式						住居 廃絶儀式	埋設土器 (住居)
		炉石の抜き取り	炉石の破壊	土器敷	土器埋納	石棒埋納	配石遺構		
中期後葉	滝瀬遺跡	1							
	下延坂遺跡		1					2	
	上ヲロウ・下ヲロウ遺跡			1					
	笛平遺跡	1							
	大畠遺跡						1		
	川向東貝津遺跡	2					1	1	1
	胡桃窪遺跡	1							
	西地・東地遺跡			1					
後期初頭～	笛平遺跡	4		1	2	2			
	大畠遺跡			1				1	
	西地・東地遺跡	1							1

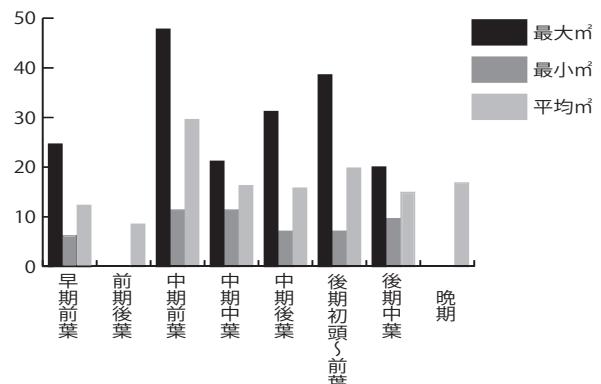
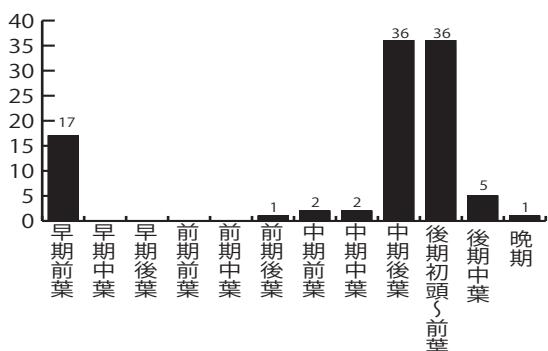


図3 時期別の堅穴建物跡の棟数の変化

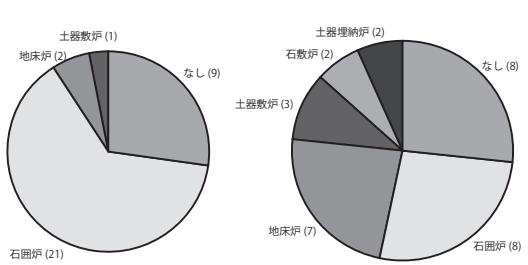
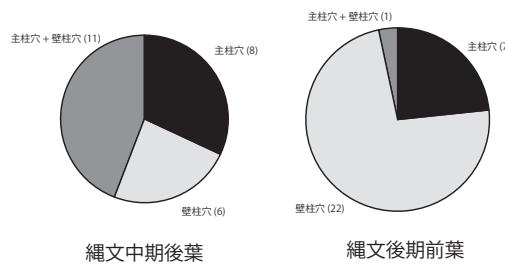


図5 中期後葉から後期前葉の堅穴建物跡の柱形態の変化

図6 中期後葉から後期前葉の堅穴建物跡の炉の変化

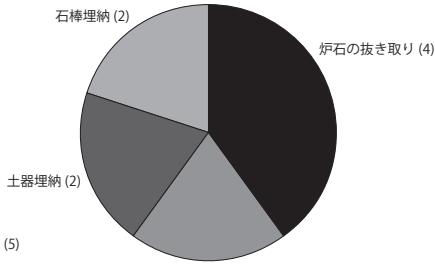
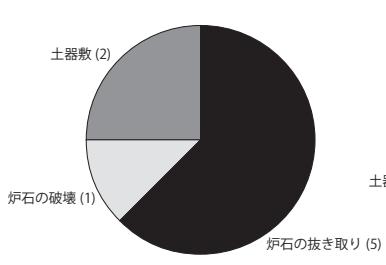


図7 中期後葉から後期前葉の堅穴建物跡の炉の廃絶儀礼の変化

あることが示された。炉の形態に注目すると、縄文時代中期後葉ではほとんどが石囲炉であつたのに対し、縄文時代後期に入ってからは石囲炉の割合は減少し、地床炉や石敷炉、土器埋納炉など型式が多様になっていることがわかる(図6)。また炉の大きさに注目した場合、縄文時代中期より縄文時代後期のほうが大型化する傾向にある。

最後に竪穴建物跡に伴う儀礼の形態を時期別にまとめたものが表3である。炉跡の廃絶儀礼に注目した場合、縄文時代中期では炉石の抜き取りがほとんどであったが、縄文時代後期に移つてからは、炉の形態の変化と同じように土器埋納や石棒埋納など廃絶儀礼も種類が増えている(図7)。一方竪穴建物跡の廃絶儀礼に注目すると、配石遺構が縄文時代中期後葉では行われていたが、縄文時代後期では未だ確認できていない。

4. まとめ

以上大まかにではあるが、現在確認されている設楽ダム関連遺跡の縄文時代竪穴建物跡を表にまとめ、比較してみた。今後の課題としては出土遺物のデータと合わせ、より広範囲の地域に対象を広げ、竪穴建物跡のデータの比較を行なっていきたい。

謝辞

本稿の執筆にあたり愛知県埋蔵文化財センターの蔭山誠一氏よりご教示を賜った。末筆ながら感謝を申し上げる。

引用・参考文献

- 愛知県埋蔵文化財センター 2016 「滝瀬遺跡」『年報 平成27年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2017 「滝瀬遺跡」『年報 平成28年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2018 「大畑遺跡」『年報 平成29年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2019 「石原遺跡」「滝瀬遺跡」『年報 平成30年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2020 「万瀬遺跡」『年報 令和元年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2021 「上ヲロウ・下ヲロウ遺跡」「胡桃窪遺跡」『年報 令和2年度』
愛知県埋蔵文化財センター 2022 「大崎遺跡」「下延坂遺跡」『年報 令和3年度』
川添和暁編 2019 『西地・東地遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第211集
川添和暁 2020 「設楽町津具の大根平遺跡・鞍船遺跡について」『研究紀要第22号』愛知県埋蔵文化財センター
鈴木正貴編 2022 『笛平遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第215集
樋上昇編 2020 『川向東貝津遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第213集
樋上昇編 2022 『大栗遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第218集
宮本長二郎 1996 『日本原始古代の住居建築』中央公論美術出版